

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	木村 豊
主 論 文 題 名 :				
東京大空襲の集合的記憶に関する社会学的研究				
(内容の要旨)				
1. 研究の目的				
本研究は、戦時中 1945 年 3 月 10 日に米軍によって行われた東京大空襲の記憶が、現在の日本社会の中で、いかに表象されており、いかに想起されているのか、について検討することを目的としている。 これまで、東京大空襲に関する学術的な調査研究はほとんど行われておらず、そのため、戦後日本社会の中で東京大空襲については、「戦時中東京は、1945 年 3 月 10 日の大空襲を中心として 100 回を超える空襲を受け、罹災者約 270 万人、死者約 10 万人の被害を出した」というような被害の概要が繰り返されてきた。そうした状況に対して、東京大空襲の記録化はその当事者によって進められてきた。1970 年代には東京大空襲の体験を記録する市民運動が進められており、1990 年代には東京大空襲死者の氏名を記録する市民運動が進められている。 そうして戦後日本社会の中で、東京大空襲とはいかなるものであったのかという問題は、その当事者によって明らかにされてきた。そこには、東京大空襲の記憶の実践を見ることができる。つまり、大空襲の当事者は、戦後生活の中で、自らが被災した東京大空襲の記憶と向き合う中で、ある人は自らの大空襲の体験を書き記し、ある人は大空襲で亡くなった家族を供養し、ある人は大空襲に関する市民運動に参加したりするなど、そうした大空襲に関わる社会的な行為を行っており、そうした行為を通して大空襲の記憶を想起している。本研究が対象としているのは、そうした戦後日本社会における東京大空襲の記憶との向き合い方である。				
2. 各章の要約				
(1) 「先行研究と本研究の位置づけ (1 章)」				
1 章では、本研究において東京大空襲の集合的記憶について記述分析していく上での枠組みについて検討した。まず、戦争災害に関する先行研究として、社会学の中で行われた被爆者調査について検討した。戦後 70 年の中で、数多くの社会的な被爆者調査が行われてきたが、そうした調査の中では、被爆者との距離の取りづらさを見ることができる。つまり、そこでは調査者が、被爆者をその外側に立って観察することも出来ないが、被爆者と同じ立場に立つ事も出来ないというような調査の困難を抱えており、そうした被爆者との距離の取りづらさは、社会学によって原爆を捉えることの難しさとなっていた。そしてそれは、それまでの社会を解体するような戦争災害を捉えようとするときに共通して立ち現れる問題であると考えられる。 そこで、そうした戦争災害を捉える枠組みとして、社会学における集合的記憶研究について検討した。集合的記憶研究は、記憶の社会的側面について検討するものであるが、それは記憶をめぐる個人と社会的集団との関係に注目するものである。そのため、ある過去の出来事の記憶を想起しようとするとき、個人は集団の成員としてその記憶を想起すると考えられる。特に、近代の社会における集合的記憶は、その複数性によって特徴づけることができる。つまり、近代社会において過去の出来事は複数の集団によって表象されており、人びとは、そうした複数の集団との関係の中で過去を想起していると考えられる。 本研究では、そうした枠組みを用いて東京大空襲の記憶について検討するため、過去の出来事の記憶を想起する人びとに対して、二つの問いをもって調査を進めてきた。それは、なぜある特定の社会的集団との関係で過去の出来事の記憶と向き合うようになったのかと、その社会的集団が表象する記憶の社会的枠組みを用いることによっていかに過去の出来事を想起しているのかである。それによって、ある特定の社会的集団との関係の中で東京大空襲の記憶と向き合っていく過程について検討するとともに、そうした社会的集団が表象する記憶の社会的枠組みを用いて想起されている大空襲の記憶について検討してきた。そしてそれらを統合することで、本研究では、日本社会は東京大空襲の記憶といかに向き合ってきた／いるのかについて記述分析してきた。				

(2) 「東京大空襲体験の記録と記憶 (2章)」

2章では、1970年代に「東京空襲を記録する会」が進めた『東京大空襲・戦災誌』の編纂事業を取り上げ、そうした市民運動の中で成立する東京大空襲の集合的記憶について検討した。東京大空襲の記録化が本格的に進められるようになったのは、大空襲から25年以上が経過した1970年代になってからであった。大空襲の当事者が中心となって「東京空襲を記録する会」が立ち上がり、ひとりひとりの空襲の体験を重ねていくことで東京大空襲時の状況を再現する運動が進められ、『東京大空襲・戦災誌』が刊行されている。

その中では、空襲の体験を書く上での「ポイント」として、「戦災の日」「どう逃げたか」といったことが示されており、それは、『戦災誌』の中に記される空襲の体験を枠づけるものとなり、それは特に、炎の中を逃げ回ったというような大空襲の体験のイメージをかたちづくるものとなっていった。そうした空襲体験記の募集に自らの空襲体験を応募しようとするとき、どのような体験者が「本当の空襲体験者」であるのかといったことや、そうした体験者によってどのような空襲体験が書かれるべきかといったことが問われることとなり、それらは空襲の体験を書くときの規範となっている。

また、空襲の体験を書くということは、空襲の体験が公的に価値づけられていくことを意味しているが、空襲被災者の多くは家族と共に空襲を経験しているため、空襲の体験は家族を基盤として成立している。そのため、空襲の体験記は、自らの空襲の体験を公的なものにすることが求められる力と、自らの空襲の体験を私的なものとしてとどめておこうとする力との拮抗の中で成立することとなる。そして、空襲の体験を書き記しそれを公にすることというのは、その体験を公に発表することを手助けする社会的集団と空襲と共に体験した家族という、複数の社会的集団との関係の中で成立している。そして、体験者は、そうした複数の社会的集団の間で「葛藤」しながらも、空襲の体験を書くということを通して自らの空襲体験を想起している。

(3) 「東京大空襲死者の祈りと記憶 (3章)」

3章では、東京大空襲死者が供養される場とそこにお参りする遺族について取り上げ、そうした死者に対する祈りを通して成立する東京大空襲の集合的記憶について検討した。東京大空襲の死者は、「家」の墓、地域のモニュメント、東京都の公的な慰霊・追悼施設という複数の社会的集団によって供養されており、遺族はその複数の場所にお参りすることによって大空襲で亡くなった家族を供養している。そこには、東京大空襲死者の多重的な死者供養のあり方を見ることができる。

まず、横網町公園では、東京都によって空襲死者の遺骨と名前を軸として空襲の死者に対する供養の場が成立していった。そこでは東京の空襲死者が集められ、空襲による「遭難者」「犠牲者」という「ふつうではない」死として位置づけられることで、その集合的な死者が供養されている。また、東京大空襲の被災地域では、各社会的集団によって空襲で亡くなった集団の成員を供養するための供養の場が成立していった。そこでは地域の空襲死者が集められ、地域の空襲による「殉難者」「犠牲者」という「ふつうではない」死として位置づけられることでその集合的な死者が供養されている。

そして東京大空襲死者の多重的供養がつくられていく中で大空襲の死者は、「家」・地域集団・東京都という複数の集団によって祀られており、地域集団や東京都では「ふつうではない」死者として供養され、「家」では「ふつう」の死者と同じように供養されており、遺族は、そうした複数の場所にお参りしている。その際遺族は、複数の集団によって示される「ふつうの死」・「ふつうではない死」という二つの位置づけの間で「葛藤」しながらも、それらを両立させることによって空襲で亡くなった家族を供養しその死者を想起している。

(4) 「東京大空襲死者の記録と記憶 (4章)」

4章では、1990年代に「東京大空襲犠牲者氏名を記録する・墨田センター」が進めた東京大空襲死者の氏名を記録する市民運動を取り上げ、そうした市民運動の中で成立する東京大空襲の集合的記憶について検討した。東京大空襲死者の記録化が本格的に進められるようになったのは、大空襲から50年以上が経過した1990年代になってからであった。大空襲の当事者が中心となって「東京大空襲犠牲者氏名を記録する・墨田センター」が立ち上がり、10万人と言われる大空襲死者のひとりひとり氏名を記録する運動が進められ、「東京空襲犠牲者名簿」がつくられている。

氏名記録運動では、空襲によって家族を亡くした遺族と空襲を直接体験した体験者という二つの立場から、大空襲の死者が想起され／語られているが、その手助けとなっているのが、「せめて名前だけでも」という運動のスローガンであり、それはこの運動の中で、大空襲の死者を想起する／語るための枠組みとなっている。氏名記

録運動の中で、空襲の死者はこのスローガンを通して表象されており、遺族や体験者はこのスローガンを通して、空襲の死者を想起し／語っている。ただ、二つの立場によってこのスローガンが表わすものは異なっている。

遺族という立場からは、このスローガンを通して、空襲で亡くなった家族の遺体や遺骨を見ることができなかったことが語られており、体験者という立場からは、このスローガンを通して、名前も分からない大量の遺体を見たことが語られていた。そうしたスローガンを通して語られる不十分さの訴えは、氏名の記録へと向かう原動力となっている。つまり、東京空襲死者の氏名を記録することは、それら二つの立場から語られる不十分さを補おうとするものであると言える。そこでは、遺族と体験者が、「せめて名前だけでも」という空襲死者の記憶の社会的枠組みを二つの立場で共有することによって空襲の死者を想起し／語っているとともに、その記憶の社会的枠組みは、氏名記録運動を支えるものとなっている。

（5）「ある家族の東京大空襲の記憶（5章）」

5章では、東京大空襲を被災したある一つの家族（5人の姉妹）へのインタビュー調査を取り上げ、その家族の中で成立する東京大空襲の集合的記憶について検討した。東京大空襲は、生活空間が被災場所となるため、家族で大空襲の中を逃げまわった体験者が多く、また、大空襲によって家族を亡くした戦災遺族も多い。したがって、東京大空襲において家族は重要な経験の基盤となっており、そこでは体験者・遺族という空襲に対する二つの関わり方が複雑に重なり合っている。

そのため、東京大空襲を被災した家族は、体験者／遺族という空襲に対する二つの関わり方の重なりの中で、さまざまな経験を有している、と同時に、そうした空襲の経験を書こう／語ろうとすると、そうした二つの関わり方の間で、空襲の経験を書く／語ることの困難さを抱えている。そこで、本研究では、東京大空襲を経験したある一つの家族の各人に対して、「あなたにとって、東京大空襲がどのようなものであったのか／あるのか」という問いをもってインタビューを行い、そうして語られた各々のライフヒストリーにおける東京大空襲の経験を重ね合わせることによって、家族における東京大空襲の記憶の一端を示してきた。

そうして本論で見てきた家族の各人によって語られる東京大空襲の経験は、一方では、家族の中で共通の語り、共通の意味づけがなされており、それは家族の中で「共通」のものでありながら、その一方では、各々によって、異なる語り、異なる意味づけがなされており、それは各人にとって「固有」なものである。さらに、そうした家族の各人の「固有」な経験は、それ単独で存在するのではなく、家族における東京大空襲の物語の中に位置づけられている。そこでは、家族の各人と家族という集団との相互作用によって家族における東京大空襲の集合的記憶がつくられており、そこで語られる家族における東京大空襲の記憶は、家族の中で、重層的な集合的記憶／想起のかたちをなしていた。

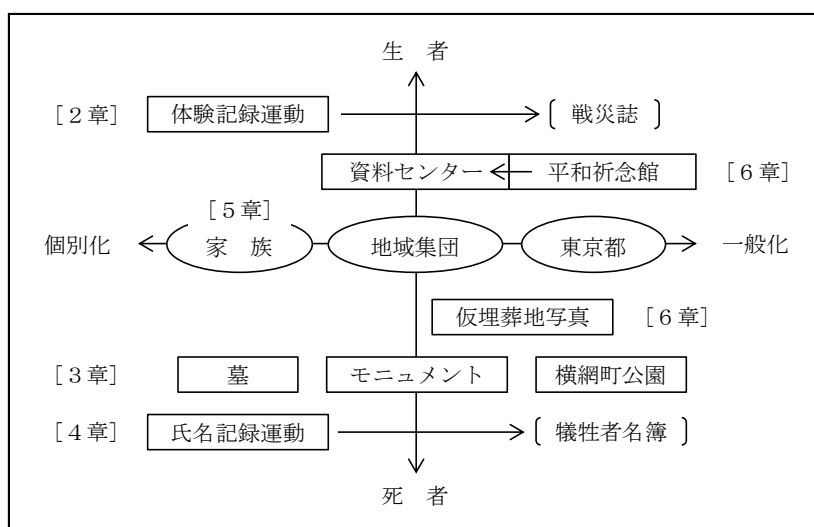
（6）「東京大空襲の記憶と痕跡（6章）」

6章では、東京大空襲の痕跡とそれをめぐる活動について取り上げ、そうした活動を通して成立する東京大空襲の集合的記憶と記憶の継承について検討した。戦時中東京の空襲は東京の下町地域を中心として甚大な被害を及ぼしたが、現在東京大空襲の被災地域を歩いても、街の中に大空襲の痕跡を見つけることは難しい。東京大空襲の直後その被災地域には大空襲の痕跡が溢れていたが、そのほとんどは、戦後復興とその後の経済成長・都市開発の中で失われていった。そこには、東京大空襲の記憶の「社会的な忘却」を見ることができる。

そのため、東京大空襲の痕跡は、その場所の開発が行われるかどうかと、そのモノの保存が行われるかどうかによって、（1）取り壊されていくもの（2）その場所で保存されるもの（3）場所を移されて保存されるもの（4）その場で残っていくもの、の4つの進路を辿っていった。そこには、東京大空襲の記憶の分水嶺を見ることができる。そうして東京大空襲の痕跡は、その多くが取り壊されていき、その場で保存されているものも少なく、一部は民間の資料館である東京大空襲・戦災資料センターの中に集められ保存されていき、橋や公園、寺院・神社などの開発の対象とはならなかった場所においてはその場で残されていった。そしてそれらは、東京大空襲の記憶を想起するための枠組みとなっている。

一方、仮埋葬地は、戦時中空襲の死者を一時的に埋葬したにもかかわらず、現在そうしたことを伝える痕跡がほとんど残されていない場所であるが、戦争を経験していない世代の写真家によって、そうした仮埋葬地にある「ふつう」の風景の写真を撮る活動が進められている。それは、空襲の死者を「ふつう」の生活空間の中に位置づけることで、その死者を想起しようとするものであり、そうした実践は、戦争を経験していない世代の人びとが東京大空襲を想起する一つのあり方を示唆するものとなっている。

図 東京大空襲の集会的記憶の布置図



3. 結論

戦後日本社会の中で、東京大空襲の集会的記憶は、大空襲の死者と生者をめぐって、大空襲の当事者を中心とした個人と複数の社会的集団の関係の中で成立してきた。そこには大空襲の記憶と向き合う社会の在り方を見ることができる。本論で見てきた東京大空襲の集会的記憶の布置関係を示したものが上の図である。

東京の下町地域を焦土と化した東京大空襲は、その地域の社会的集団を破壊するものとなり、また、その地域に生きていた人びとの生活を破壊するものとなった。そのため、大空襲の被災者は、焦土の中から自らの生活を再建するとともに社会的集団を再建してきたが、そうした中で被災者は、自らが被災した大空襲について振り返るとともに、あの空襲とはいかなるものであったのかという問いを追究してきた。そしてその中で被災者は、複数の社会的集団と関わりながら、ある人は大空襲の体験を書き記し、ある人は大空襲の死者を供養し、ある人は大空襲に関する市民運動に参加した。そうした大空襲に関わる社会的な行為を通して、各社会的集団の中では、体験記やモニュメントなど大空襲の集会的記憶を表象するものがつくられていくとともに、被災者は、自らが被災した大空襲の集会的記憶を想起してきた。

そうして東京大空襲の記憶と向き合う中で通底しているのは、大空襲が、被災地域に生きていた人びとを生と死とに分けたということであった。とりわけ、生活空間が被災場所となった東京大空襲では、東京の下町地域に住んでいた人びとを生と死とに分けるとともに、その地域に存在した各社会的集団内の人びとを、生と死とに分けた。そうした中で、大空襲の中を生き抜いた人びとと大空襲の中を生き抜くことができなかった人びとの関係で、「生き残った」という認識が生まれ、それは、大空襲の後を生きる被災者の生活を規定するものとなり、また、大空襲によって破壊された社会的集団を再建していく起点となった。そして、そうした東京大空襲から立ち上がる被災者と社会的集団との関係の中で、大空襲の集会的記憶は成立してきた。

そうした東京大空襲の集会的記憶は、大空襲の被災地域で社会を再建していく被災者の生活の中から立ち上がってきたものであり、それは、大空襲の中の生と死を表象するものであるとともに、被災者自身が大空襲の中で生き残ったことを受け入れるための道具となるものであった。そこには、東京大空襲によって破壊された社会が再建されていく中で大空襲の記憶と向き合う社会がつくられていく過程を見ることができる。そこでは、大空襲によって破壊された被災者の生活と被災地域の社会的集団が再建されていく中で、被災者と複数の社会的集団との相互作用が生まれ、そうした中で、大空襲の記憶がつくられていくとともに、大空襲の記憶と向き合う社会がつくられていった。東京大空襲の集会的記憶は、そうした大空襲の後を生きる人びとの生活の中から生成されてきたものであり、そうした中で、大空襲の記憶と向き合うことは人びとの生活の一部となっていくと考えられる。